



漢詩を味わう

第123回

つちのといのとし
己亥歳

そうしよ
曹松

澤國江山入戦圖

たくこく
沢國の江山 せんと
戦図に入る

生民何計楽樵蘇

せいみん
生民何の計あつてか しょうそ
樵蘇を楽しまん

憑君莫話封侯事

よ
君に憑つて話すこと莫れ ほうこう
封侯の事

一将功成萬骨枯

いっしやうこうな
一将功成つて ばんこつか
万骨枯る

沢地の多い肥沃なこの江淮の一带にも、戦争の惨禍が及んだ。

人民はその日常生活を楽しむ手立てさえどこにもない。

どうかあなたお願いします。戦争に行つて諸侯に封じられる事など話題にしないでください。

一人の将軍が戦功をたてるとき、万人の兵士の身が戦場に枯れてゆくのですから。

《澤國》川や湖沼の多い低湿の地方。ここでは江淮（揚子江下流と淮河の流域）。

《生民》人民。民族。

《樵蘇》樵はきこり。蘇は草刈り。民衆の日常生活をさす。

《憑君》憑はたよりにする、よりかかる意。あなたにお願いする。

《封侯》戦争で手柄をたてて、爵位を授けられることをいう。

曹松（八三〇―九〇一）は晩唐の詩人です。己亥歳は今年と同じ干支です。甲子から始まる十干十二支が六十通りあり、自分の生まれた干支が六十年たつて廻つてくると「還暦」といいますが、この詩の己亥の歳は唐末期の八七六年に当たります。

この年、広州で兵を養っていた黄巢が、唐王朝打倒を旗印にかかげ、洛陽、長安へと北進を開始した年で、江淮一帯も大動乱に巻き込まれました。黄巢はもともと塩の闇商人でしたが、当時、塩を専売にしていた唐朝廷が、財政が窮迫したために安易な解決策として塩の値段を吊り上げて、同時に厳しく闇取引を取り締まりました。そこで同じ仲間の王仙芝が乱を起こしたのに呼応して、黄巢も塩売で蓄えた潤沢な資金をもとに農民蜂起の大義を立てて挙兵しました。黄巢の乱と言われるこの騒乱で、黄巢は八七四年から中国全土を転戦して、八八〇年に長安に入り国号を斉と称して自ら皇帝に即位しましたが、わずか四年の短命に終わりました。

農民起義の階級闘争として現代中国では高く評価されているようですが、結局は騒乱に乗じて軍閥化した私兵と官軍との内乱で、苦しみぬくのは一般大衆でした。その後、二九〇年に亘つた唐は急速に衰退していきます。

曹松はこのころ江淮周辺を放浪していて、戦乱で疲弊する民衆の姿を目の当たりにしました。この詩はその民衆の苦しみを訴え、功名のために兵卒を死に追いやつて顧みない将軍を非難します。最後の「一将功成つて、万骨枯る」はあまりにも有名な一句です。

参考文献「中国古典選」三体詩「朝日文庫・唐詩鑑賞辞典（東京堂出版）漢詩のころ」時事通信社

楚雨紅樹に迷い 吳霜白蘋老ゆ 一聲京口の雁 愁殺す江を渡るの人

楚雨紅樹に迷い 吳霜白蘋老ゆ 一聲京口の雁 愁殺す江を渡るの人

《大意》楚の地では雨の中、紅葉を眺めてきたが、ここの呉の地はすでに霜が降りて白い浮き草は枯れている。京口に雁の鳴き声がひびき、江を渡る人の旅愁をかきたてる。(周永銓詩・京口聞雁)

静功寿有るを知り 晩節更に能く堅し

静功知有寿

晩節更能堅

徐到中

静功起有寿

晩節更能堅

徐到中

《大意》心静かにして物事にあせらなければ寿命の長いことを知り、老年に至ってはさらに心が堅固であることが大切。(徐到中)

読み
好鳥眠りを妨げず（鳥の声も眠りを妨げることはない）

妨 好
眠 鳥
不

佐藤象雲書



一般部規定課題出品について

- ・規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。
- ・初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません
- ・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

連月課題

「唐庚詩・醉眠」

山静似太古

山は静にして太古に似たり

日長如小年

日は長くして小年の如し

餘花猶可醉

餘花猶酔うべく

好鳥不妨眠

好鳥眠りを妨げず

世味門常掩

世味には門常に掩い

時光篋已便

時光篋已に便なり

夢中頻得句

夢中頻りに句を得たるも

拈筆又忘筌

筆を拈れば又筌を忘る

草書

行書

好鳥不
妨眠

好鳥不
妨眠

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

次号課題

隸書

世味門
常掩

好鳥不
妨眠

世味には門常おおに掩い

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

支 部	順 位	氏 名
秋の山紅葉をゆきとたむくれば		
ほむ我さへぞ旅心地す		

紀貫之

和泉溪石先生書

高冠陪輦驅轂振纓
 高冠陪輦驅轂振纓
 高冠陪輦驅轂振纓

佐藤象雲書

音

コウカンバイレン
クコクシンエイ

略解

冠を着飾った多くの侍臣が鳳輦(帝の乗り物)に陪従し
轂車を走らせて繕(冠の紐)をなびかせて供奉する

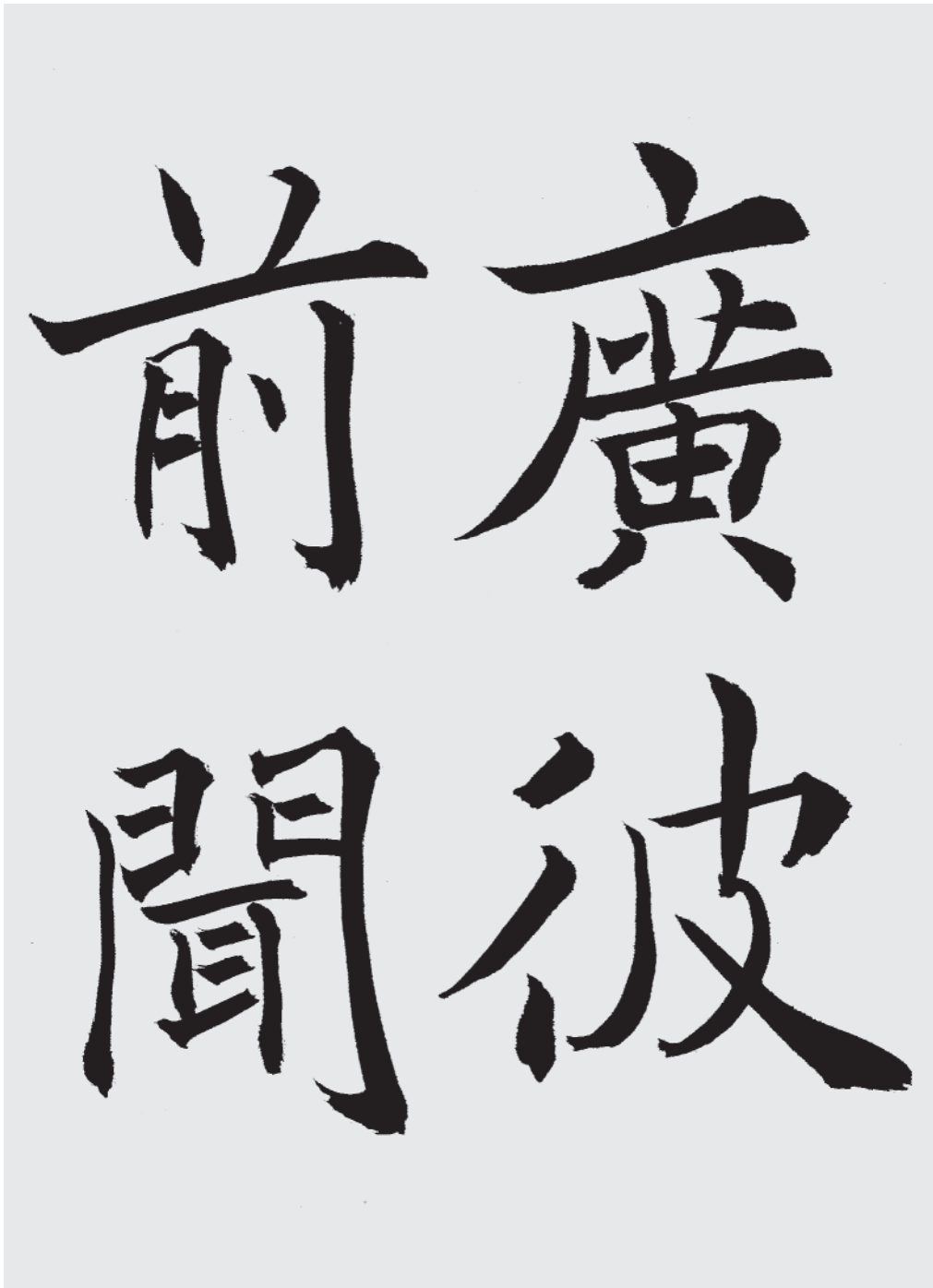
廣彼前間

彼の前間を広め……

褚遂良・雁塔聖教序

(初唐・西暦六五三年)の臨書(50)

象雲臨



【廣彼前間】

玄奘三蔵法師は密出国の禁を犯して印度に亘り、艱難辛苦の旅を経て持ち帰った六五七部の経典を持ち帰り翻訳しました。この大事業とその功績を讃えて、太宗が「序」を皇太子だった高宗が「序記」を玄奘法師に賜りま

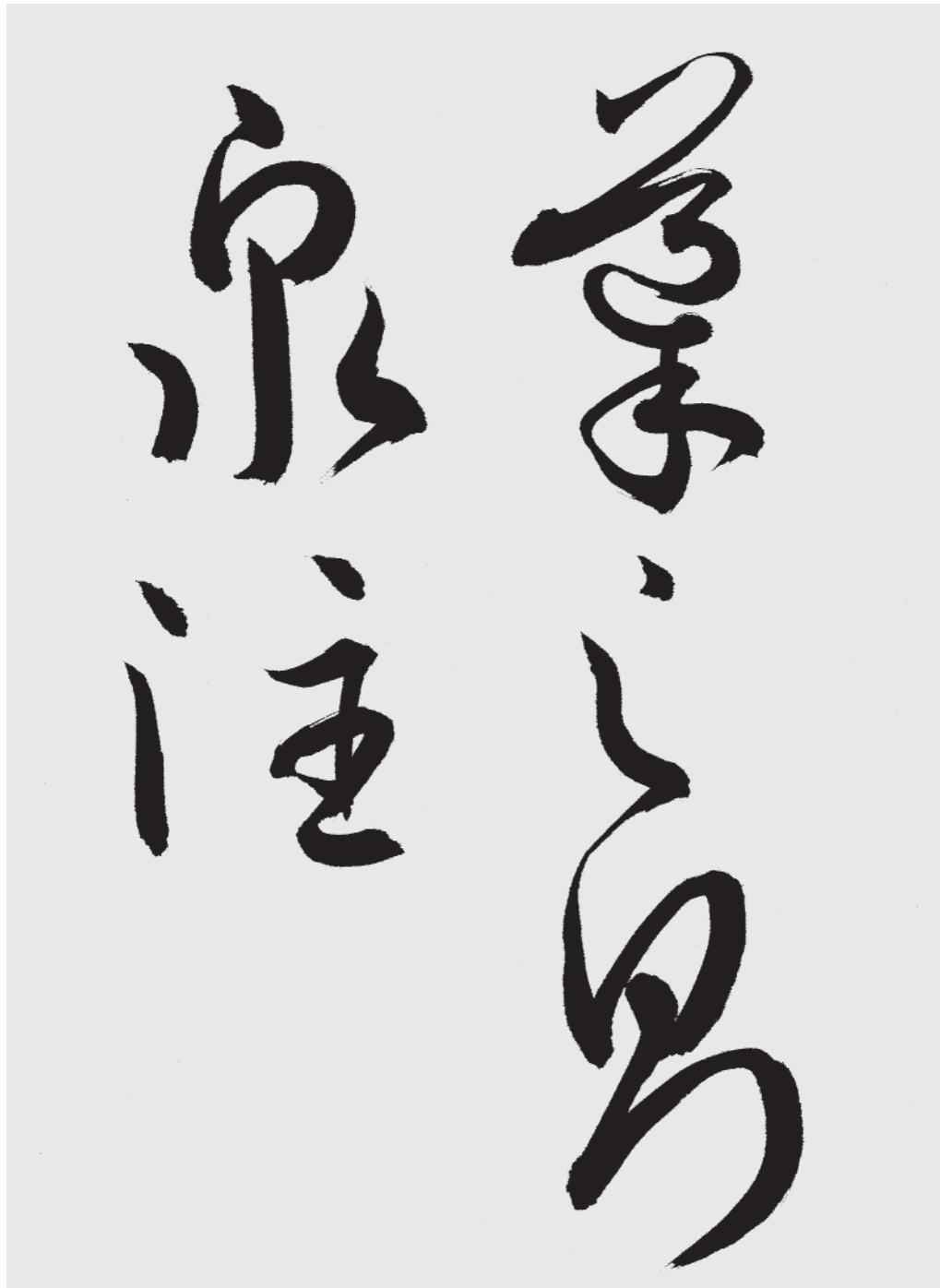
す。雁塔聖教序は、その序と序記を褚遂良が浄書したものです。太宗は玄奘の帰国後、密出国の罪を問わず、さらに西域で見聞した事柄や旅行記を提出することを玄奘に命じており、これに応じて編纂された報告書が『大唐西域記』です。これは約八百年後に奇伝小説『西遊記』によって多くの人々に知られるようになりま

す。玄奘の旅が仏教徒の間で神聖化されて、敦煌莫高窟で発見された壁画に、玄奘が馬や猿を伴って経典を背にして旅する姿が描かれていたことから、奇伝小説として書かれたともいわれています。

さて今月の「彼の前間を広め」とは先人の教えを広めるという意味です。

【廣】黄は内部の分間が整齊に保たれている。【彼】行人偏はゆったりとして各線短めに。縦画はやや左に位置して、皮の左払いの空間を残している。

【前・間】各縦画の反り具合に留意。殆どの短い横画は縦画との接触を避けて空間が明るい。



之を導けば則ち泉のごとく注ぎ……

■孫過庭・書譜（初唐・西暦六八七年）の臨書（31）

象雲臨

【導之則泉注】

今月の「之を導けば則ち泉のごとく注ぎ」は古来の名跡の筆致は、泉から水がほとばしるように筆が流れているという大意です。草書の美しさは、筆の動きによる流動美と、線の太細や結体の展開による変化美です。孫過庭はそのような事柄を自然の事象に譬えて説明しています。

今月の五文字は比較的穏やかで落ち着いた書きぶりで、ふっくらとした線描が美しい一節です。

【導】上部を広く下部を小さくして品致が高い。書譜のなかで上下の部首が重なる字は概ね頭大下小に作られている。

【之・則】之の点は離して書く。糸を引くような自然な連綿で則と繋がれている。

【泉】筆の腹を使ってふっくらとした線だが、筆先はしっかりと活躍している。

【注】偏旁間は十分に広いが、よく呼応して一体感がある。